

## 巻頭言

### 「目に見えない大切なもの」

法人化された国立大学では各種目標、各種計画がたてられ、その成果を自己点検自己評価し、外部評価も受けねばならない。そればかりでなく、大学や研究科をまたぐ大型プロジェクトが教育の分野にまで導入され(COE, GCOE, 大学院GPなど)、それらをめぐっての競争も激しい。気がついてみると自分はそのまっただなかで数年を過ごしてきた。

悪平等との批判もあるだろうが、かまびすしいプロジェクト競争が始まる以前の、かつての大学にノスタルジーを感じる。競争原理全盛となる以前の大学にあった、「ゆっくり流れる時間」、「社会の風潮われ関せず」という大学教員の気風は、「独創的な研究を生み出す土壌」ではなかったか？

惑星探査に象徴される大型研究プロジェクトは、その企画から事後評価までのすべてが公開され、研究コミュニティからの厳しい批判に耐え、社会に成果を還元されることが求められる。そのことに異存はない。しかしながら、そうしたプロジェクトのディシプリンが持つ容赦ない実務性が、「大学に流れる時間を早め」、「教員の気風をビジネス風にした」とすれば、「独創的な研究を生み出す畑が荒れたこと」への危機を感じる。

学部教育から博士論文審査までを受け持つ大学教員にとって、何より大切な仕事は、その専門領域の将来を担う人材を育て、世に送り出すことである。研究室での学生教育は、あまり目に見えないが大学教員の最も大切な仕事である。博士課程に進学する学生数の低下が大問題になっている。私の観察したところ、大学院生が研究者を目指す最大の要因は指導教員の研究者としての魅力である。つまり、大学教員が現代社会の持つ様々な実務的要請に答えつつ、自らの創造の泉を枯らすことなく、いかにして学生一人一人と本気で過ごす時間を持てるかに研究分野の将来がかかっていると自戒するこの頃である。

高橋 栄一(東京工業大学)